

此の佛洞は全く砂に埋れてあつたのを、八年程前に王という道士が、僅かの喜捨を熱心に集めて資金を作り、二三年もかゝつて掘出したもので、漸次佛洞の内部を修繕したが、窟内の高坐の佛像を取換へる際に、通路の右側の壁に少しく龜裂があつて、其の奥に室があるように見えたので、壁を壊して見たところが、書物を充滿した一室が現はれて來たのであつた。これはほゞ一九〇〇年のことと思はれる。室内には書物や繪畫の類が五百立方呎ばかり積上げてあつて、僅かに人一人を容れる餘地があるだけであつたといふ。発見のことは、早速道士から蘭州の總督衙門に報告され、數種の見本も送られたが、その見本の内容が佛典であつたがためか、格別役人の注意も惹かず、其の儘保存せよの指令を得たとのことである。役人たちには、譯も分らぬ數車に餘る古書のために、運賃を拂つたり、保存の面倒をかけられたりするのは、さだめし迷惑なことであつたらう。

遺物の研究

探檢の事業の始まつて以來今日に至るまで早くも二十年、必ずしも短しとしない。この間に、いかなる研究の結果が得られたか、二十年間の此の研究につき、東西學者の努力苦心の跡を知らうとすれば、まず之に關した報告著書等を集めて、卓上に積み上げねばならぬ。大きなものでは近刊のスタイン氏のセリンディアから、小さなものは數頁の、しかも重要な研究の發表に至るまですべてこれを集め得た時に、その示す數量だけが既に人を驚嘆せしむるに十分であらう。勿論研究は今なおその道程にある。併しながら、前に記したパワー文書によりて、此の地方の遺物に着眼し、その後蒐められた読み方も分らぬ文字、従つて勿論解釋することの出來ない國語で書いた文書な